

《最終戦争論》

图书基本信息

书名：《最終戦争論》

13位ISBN编号：9784122038981

10位ISBN编号：4122038987

出版时间：2001

出版社：中央公論新社

作者：石原莞爾

页数：124ページ

版权说明：本站所提供下载的PDF图书仅提供预览和简介以及在线试读，请支持正版图书。

更多资源请访问：www.tushu000.com

《最終戦争論》

内容概要

本書はその直前、昭和15年5月に行われた講演に若干の追補をしたものである。

石原がここで「最終戦争」と言うのは、この次に行われる「決戦戦争」によって、世の中から戦争がなくなる、という意味である。なぜなら、戦争発達が極限に至るため、次に起こる戦争の勝者がトーナメントにたとえれば最終的な勝者となり、兵器の発達によって人類はもうとても戦争をすることはできなくなる、ということだ。これは、核の所有により、局地戦はともかく全世界を巻き込む大戦を事実上不可能に近くしている現状を見れば、正鵠を射ている。

しかも、「真の決戦戦争の場合には軍隊などは有利な目標ではなく、最も弱い人々、最も大事な国家の施設が攻撃目標になる」「徹底的な、一発あたると何万人もがペチャンコにやられる大威力のものができねばならない」「破壊兵器は最も新鋭なもの、例えば今日戦争になった次の朝、夜が明けてみると敵国の首都や主要都市は徹底的に破壊されている」などの言葉は、まさにその数年後に起こった原爆投下を予言しているかのようだ。

石原は、最終戦争後、必然の結果として「そして世界はひとつになる」と語っている。しかしそれが良くも悪くも実現していない現在、次に起こりうる最終戦争がいったい何をもたらすのか。不穏な世界情勢に無関心ではいられない。

《最終戦争論》

作者简介

石原莞爾は「満州国」建国の立役者であり、昭和期陸軍の一方の雄であったが、東条英機と対立し、太平洋戦争開戦時には予備役に追いやられていた。

《最終戦争論》

精彩短评

《最終戦争論》

章节试读

1、《最終戦争論》的笔记-第48页

言い換えれば今から三十年内外で人類の最後の決勝戦の時期に入り、五十年以内に世界が一つになるだろう。
这个还真有点神棍的意思，虽然推理过程一如既往有问题。石原的意思和“历史终结论”至少在外观上是很像的，1940年之后五十年，历史就该终结了。

2、《最終戦争論》的笔记-第24页

しかし私は、この計画変更にも持久戦争に対する予感が無意識のうちに力強く作用していたことを認めます。即ちシュリーフェン時代にはフランス軍は守勢をとると判断されたのに、その後、フランス軍はドイツの重要産業地帯であるザール地方への攻勢をとるものと判断されるに至ったことが、この方面への兵力増加の原因であります。また大規模な迂回作戦を不徹底ならしめたのは、モルトケ大将が、シュリーフェン元帥の計画では重大条件であったオランダの中立侵犯を断念したことが、最も有力な原因となっているものと私は確信いたします。ザール鉞工業地帯の掩護（えんご）、特にオランダの中立尊重は、戦争持久のための経済的考慮によったのであります。即ち決戦を絶叫しつつあったドイツ参謀本部首脳部の胸の中に、彼らのはっきり自覚しない間に持久戦争の考慮が加わりつつあったことは甚だ興味深いものと思います。
这一段是标准的事后诸葛亮，扯的也太远了。

3、《最終戦争論》的笔记-第43页

もう今日は英帝国の領土は日本やアメリカの自己抑制のおかげで保持しているのです。英国自身の實力によって保持しているものではありません。
与经典地理政治学吻合的结论：在外围大国兴起之后，作为滨外岛的英国只有在和美国这个外围国家利益一致的情况下才能对“内新月形地带”的欧陆实施控制。但石原没有看出来日本也是一个滨外岛，在和美国利益冲突的情况下，既要深入亚洲大陆、又要追逐海上统治权是极其危险的。

4、《最終戦争論》的笔记-第34页

戦争発達の極限に達するこの次の決戦戦争で戦争が無くなるのです。人間の闘争心は無くなりません。闘争心が無くならなくて戦争が無くなるとは、どういうことか。国家の対立が無くなる即ち世界がこの次の決戦戦争で一つになるのであります。

5、《最終戦争論》的笔记-第38页

しかし世界は欧州戦争前の国家主義全盛の時代までは逆転しないで、国家連合の時代になったと私どもは言っているのであります。
他老先生的看法和科耶夫很有点像：经过“最终战争”，敌我对立（=政治）被消灭，不再有国家区隔，世界得以统一。但在当前阶段，政治有其“剩余价值”，国家依旧存在。但从一战的情况看，民族国家作为总体战的主体过于单薄了，在“最终战争”中必须也只可能以“国家联合”的形式出现。

6、《最終戦争論》的笔记-第35页

今の世の中でも、もしもピストル以上の飛び道具を全部なくしたならば、選挙のときには恐らく政党は演壇に立って言論戦なんかやりません。言論では勝負が遅い。必ず腕力を用いることになります。しかし警察はピストルを持っている。兵隊さんは機関銃を持っている。いかに剣道、柔道

《最終戦争論》

の大家でも、これではダメだ。だから甚だ迂遠な方法であるが、言論戦で選挙を争っているのです。兵器の発達が進んで世の中を泰平にしているのです。この次の、すごい決戦戦争で、人類はもうとても戦争をやることはできないということになる。そこで初めて世界の人類が長くあこがれていた本当の平和に到着するのであります。

技术进步导致的兵器杀伤力扩展使得战争的破坏性和损耗不断上升。当破坏性上升到所有人都无法接受的程度，长期和平就成为可能了。

石原在1940年还不知道原子弹此物。不过当作为决战兵器的核武器出现——更准确地说是核能力的扩散以及确保相互摧毁（MAD）状态的达成——人类的确更有可能达成“恐惧之下的和平”。

要するに世界の一地方を根拠とする武力が、全世界の至るところに対し迅速にその威力を発揮し、抵抗するものを屈伏し得るようになれば、世界は自然に統一することとなります。

依旧认为可能存在最终的“世界征服者”。

7、《最終戦争論》の笔记-第36页

この見地からすると、次の決戦戦争では敵を撃つものは少数の優れた軍隊であります。我慢しなければならぬものは全国民となるのです。最も弱い人々、最も大事な国家の施設が攻撃目標となります。工業都市や政治の中心を徹底的にやるのです。でありますから老若男女、山川草木、豚も鶏も同じにやられるのです。かくて空軍による真に徹底した殲滅戦争となります。

预见到了总体战的惨烈状况，并且和同时期欧美军事战略家一样，极其确信The Last-and-final War乃是以空袭为主要方式的歼灭战。不妨做个假设：如果石原知道有核武器这种毁灭性的“决战兵器”存在，他是否会修改既有的看法？

8、《最終戦争論》の笔记-第33页

戦術の変化を見ますと、密集隊形の方阵から横隊になり散兵になり戦闘群になったのであります。これを幾何学的に観察すれば、方阵は点であり横隊は実線であり散兵は点線であり、戦闘群の戦法は面の戦術であります。点線から面に来たのです。この次の戦争は体（三次元）の戦法であると想像されます。

从空间上看，战术的进步实质上是点-实线-虚线-面的不断延展，就这个趋势而言，未来战争的战术将扩展到三次元空间。这和下文重视空战的说法是一致的，是技术进步的结果。

それでは戦闘の指揮単位はどういうふうに変化したかと言うと、必ずしも公式の通りではなかったのであります。理屈としては密集隊形の指揮単位は大隊です。今のように拡声器が発達すれば「前へ進め」と三千名の連隊を一斉に動かすことも可能ですが、肉声では声のよい人でも大隊が単位です。われわれの若いときに盛んにこの大隊密集教練をやったものであります。横隊になると大隊ではどんな声のよい人でも号令が通りません。指揮単位は中隊です。次の散兵となると中隊長ではとても号令は通らないので、小隊長が号令を掛けねばいけません。それで指揮単位は小隊になったのであります。戦闘群の戦術では明瞭に分隊 通常は軽機一挺（ちょう）と鉄砲十何挺を持っている分隊が単位であります。大隊、中隊、小隊、分隊と逐次小さくなって来た指揮単位は、この次は個人になると考えるのが至当であろうと思います。

基本战术单位趋于小型化和灵活化，最终“个人”将成为基本战术单位。这和今天的实景愈发吻合，又是先见之明。

9、《最終戦争論》の笔记-第46页

久の昔から東方道義の道統を伝承遊ばされた天皇が、間もなく東亞連盟の盟主、次いで世界の天皇と仰がれることは、われわれの堅い信仰であります。今日、特に日本人に注意して頂きたいのは、日本の国力が増進するにつれ、国民は特に謙讓の徳を守り、最大の犠牲を甘受して、東亞諸民族が心から天皇の御位置を信仰するに至ることを妨げぬよう心掛けねばならぬことであります。天

《最終戦争論》

皇が東亜諸民族から盟主と仰がれる日こそ、即ち東亜連盟が真に完成した日であります。しかし八紘一宇の御精神を拝すれば、天皇が東亜連盟の盟主、世界の天皇と仰がれるに至っても日本国は盟主ではありません。

终于开始神棍了……

10、《最終戦争論》的笔记-第20页

特に皆さんに注意していただきたいのは、フランス革命に於ける軍事上の変化の直接原因は兵器の進歩ではなかったことであります。

けれどもフランス革命で横隊戦術から散兵戦術に、持久戦争から決戦戦争に移った直接の動機は兵器の進歩ではありません。フリードリヒ大王の使った鉄砲とナポレオンの使ったものとは大差がないのです。社会制度の変化が軍事上の革命を来たした直接の原因であります。

说得好。这段跟《万历十五年》讲戚继光那一章对照着看会非常有趣。

11、《最終戦争論》的笔记-第39页

ああいう独裁者は人類の平和のために打倒して、われわれの方針である自由主義の信条に基づく新しいヨーロッパの連合体制を採ろう。ナチスの世界観である「運命協同体」を指導原理とするヨーロッパ連盟を作るのが、ヒットラーの理想であるだろうと思います。第一次欧州戦争が終りましてから、オーストリアのクーデンホーフが汎ヨーロッパということを唱導しまして、フランスのブリアン、ドイツのストレーゼマンという政治家も、その実現に熱意を見せたのであります。今度の大破局に当ってヨーロッパの連合体を作るということが、再びヨーロッパ人の真剣な気持ちになりつつあるものと思われま。

所以说到1939年前后，其实所有人都认定欧洲成为统一体是不可避免的趋势了，只是方案截然不同：有英国佬的自由主义邦联，有纳粹的大德意志帝国，以后还有科耶夫的新拉丁帝国。今天的欧盟和其中的任何一个单独方案差别都很明显。

12、《最終戦争論》的笔记-第37页

また仮に飛行機の発達により今、ドイツがロンドンを大空襲して空中戦で戦争の決をつけ得るとしても、恐らくドイツとロシアの間では困難であります。ロシアと日本の間もまた困難。更に太平洋をへだてたところの日本とアメリカが飛行機で決戦するのはまだまだ遠い先のことであります。一番遠い太平洋を挟んで空軍による決戦の行なわれる時が、人類最後の一大決勝戦の時であります。即ち無着陸で世界をぐるぐる廻れるような飛行機ができる時代であります。それから破壊の兵器も今度の欧州大戦で使っているようなものでは、まだ問題になりません。もっと徹底的な、一発あたると何万人もがペチャンコにやられるところの、私どもには想像もされないような大威力のものができねはなりません。

说明了第一章结尾处“当前战争形态仍是持久战争”的原因：尚未出现足以克服战场空间之广大的决战兵器。可以充当世界征服者最终决战兵器的必须是可以不着陆完成环球飞行的大航程飞机。可以对比一下1950年代美苏对远程轰炸机的迷恋，以及太空武器的特性。

飛行機は無着陸で世界をクルグル廻る。しかも破壊兵器は最も新鋭なもの、例えば今日戦争になって次の朝、夜が明けて見ると敵国の首府や主要都市は徹底的に破壊されている。その代り大阪も、東京も、北京も、上海も、廃墟になっておりました。すべてが吹き飛んでしまう……。それぐらいの破壊力のものであると思います。そうすると戦争は短期間に終る。それ精神総動員だ、総力戦だなどと騒いでいる間は最終戦争は来ない。そんななまぬるいのは持久戦争時代のことで、決戦戦争では問題にならない。この次の決戦戦争では降ると見て笠取るひまもなくやっつけてしまうのです。このような決戦兵器を創造して、この惨状にどこまでも堪え得る者が最後の優者であります。

。

《最終戦争論》

预见到了远程战略轰炸的破坏力，可以说也提前四年预见了1944-45年美国以瘫痪对手工业与经济能力为导向的对日的战略轰炸。

虽然不知道核武器，但石原从直觉和经验上推理出了“杀伤力巨大的决战兵器的出现将使战争急剧短期化”这一结论。胜利者将是掌握决战兵器（以最大限度摧毁敌方）、同时又能承担总体战巨大损害的国家。

13、《最終戦争論》の笔记-第11页

戦争本来の真面目（しんめんぼく）は決戦戦争であるべきですが、持久戦争となる事情については、単一ではありません。これがために同じ時代でも、ある場合には決戦戦争が行なわれ、ある場合には持久戦争が行なわれることがあります。しかし両戦争に分かれる最大原因は時代的影響でありまして、軍事上から見た世界歴史は、決戦戦争の時代と持久戦争の時代を交互に現出して参りました。

结论是对的，但第一句讲的无凭无据。对比克劳塞维茨流露出的认为战争形态本质上有两种的倾向，石原认定存在战争的“本真形态”，那就是决战战争，但决战战争为何会变异成持久战争，就直接跳到“时代的影响”去了。整本小册子都是这个风格：结论很棒，逻辑木有。对比一下《战争论》，难道日本人更主张“顿悟”？

14、《最終戦争論》の笔记-第12页

お隣の支那では漢民族の最も盛んであった唐朝の中頃から、国民皆兵の制度が乱れて傭兵に墮落する。その時から漢民族の国家生活としての力が弛緩しております。宋和明被吃掉了：相较雇佣兵，宋与民的军制还是离农民的国民皆兵更近吧。下一页讲的“常年文尊武卑”是对的，但逻辑是随口推出来的。

15、《最終戦争論》の笔记-第5页

今次日支事変の中華民国は非常に奮発をして勇敢に戦っております。それでも、まだどうも真の国民皆兵にはなり得ない状況であります。長年文を尊び武を卑しんで来た漢民族の悩みは非常に深刻なものでありますが、この事変を契機としまして何とか昔の漢民族にかえることを私は希望しています。

16、《最終戦争論》の笔记-第45页

確かに偉いけれどもそれが隣り合わせている。いくら運命協同体を作ろう、自由主義連合体を作ろうと言ったところで、考えはよろしいが、どうも喧嘩はヨーロッパが本家本元であります。その本能が何と言っても承知しない、なぐり合いを始める。因業な話で共倒れになるのじゃないか。这个推理还是太就事论事了。转译成“德约式逻辑”，应该这么说：欧洲国家在相互争斗中，每一次都引入外部力量来恢复欧洲体系内部的均势。当引入的外部力量大到足以摧毁欧洲体系本身时，欧洲中心的时代也就终结了。

17、《最終戦争論》の笔记-第45页

人類の歴史を、学問的ではありませんが、しろうと考えで考えて見ると、アジアの西部地方に起った人類の文明が東西両方に分かれて進み、数千年後に太平洋という世界最大の海を境にして今、顔を合わせたのです。この二つが最後の決勝戦をやる運命にあるのではないのでしょうか。軍事的にも最も決勝戦争の困難なのは太平洋を挟んだ両集団であります。軍事的見地から言っても、恐らくこの二つの集団が準決勝に残るのではないかと私は考えます。

《最終戦争論》

仔细想想，大师的结论之所以看上去和麦金德/斯皮克曼们不同，关键在于他认定日本应当向大陆发展。“日中提携”的共同体，向北把俄国逐回西伯利亚以东，向西深入印度和德国会师，然后就可以去和统一的美洲对抗了。如果把这个共同体看成边缘地带强国，那么和斯皮克曼的见解就很像了；反过来说，假如日本向大陆前进的企图被挫败了，那么俄国依旧是最有希望控制欧亚大陆的，“最终战争”还是较有可能发生在俄美之间。

18、《最終戦争論》の笔记-第32页

現在は第一次欧州大戦に比べると、空軍の大進歩、戦車の進歩などがありますが、十分の戦備と決心を以て戦う敵線の突破は今日も依然として至難で、戦争持久に陥る公算が多く、まだ持久戦争の時代であると観察されます。

结论还是对的：在1940年5月底就预言技术要素不足以改变当前战争形态仍为“持久战争”这一性质，但推理又很没逻辑。

德国的总体战准备没有石原估计的那样好。另外最根本的问题在于，“世界大战”较之“欧洲大战”，在空间上完全是两个概念。石原在施利芬计划的问题上，似乎也没有发现最大的问题在于，由于在海上力量方面投入了很大财力，作为欧洲中等国家的德国完全有可能提供“经典”形态的施利芬计划硬性要求的兵力。小毛奇的调整表面是失败的战略判断，根本问题还在于目标和工具的不匹配，而工具又无法升级。

19、《最終戦争論》の笔记-第44页

この国家連合の時代には、英帝国のような分散した状態ではいけないので。

“洲级大国”兴起之后，英帝国松散的经济和政治架构在竞争中就处于劣势了，也可以说英国在第二次工业革命中没有完成国家经济和政治架构的“进化”。所以John Colomb和希利们一直鼓吹Greater Britain，但这个思路在1940年代已经没有可操作性。英帝国因而无法在“国家联合”的时代幸存下来。

《最終戰爭論》

版权说明

本站所提供下载的PDF图书仅提供预览和简介，请支持正版图书。

更多资源请访问:www.tushu000.com